

鬼はどこへ行ったか

辻 憲男(文学部教授)

“ただのまんぢゅう”というのは、源氏一門の祖・源満仲のことである。武をもって藤原氏に仕え、摂津多田に本拠を構えた。今昔物語集によると、年老いても狩りや漁を好み、生き物も人も平気で殺した。比叡山にいた息子はこれを悲しみ、師の源信(げんしん)にうち明けた。「鬼のような心の父だが、尊師のお説教ならきっと信じるにちがいない」。だが、並のことでは発心はむずかしい。源信は周到に準備をし、お供の僧とともに多田におもむいた。満仲は驚き謹んで対面し、ただちに出家を願い出た。じつは源信らは偶然を装い、弟子たちにひそかに妙なる音楽を奏させ、菩薩の姿で登場させるなど、極楽現出の芝居を仕組んだのだった。さすが浄土教の聖人、源信なればこそその知恵と実行力である。

嫡男の頼光(らいこう)は大江山の鬼退治のヒーロー。家来は坂田金時ら名高き四天王、鬼の首領は呑香童子(しゅてんどうじ)である。一行は鬼どもの幻惑にうち勝ち、囚われの人々を解放した。これは桃太郎の昔話よりもずっと古い。

昔は大みそかの夜に鬼追いをした。かの徒然草にも、追儼(ついな)の大騒ぎのあとの元旦の「華やかにうれしげ」な景を叙している。今の節分は魚の眼にヒイラギを刺し、豆をまいて鬼を追い払う。かつては人を食う怪物、恨みの死霊、地獄の使いなどと恐れられたのだが、近代は人間がこわくなったのか、鬼のほうはかわいらしく、どこへ行ったのかわからなくなった。



多田院の威風をとどめる、兵庫県川西市の多田神社。